

幼稚園における「協同」の生成過程に関する研究

学校教育専攻
幼年教育コース
M10020B
藤川 雄太

問題

友達とどのように接したらよいのか、自分の気持ちを相手に十分伝えられなかったり、思いを形にして表現することが難しい子どもがいる。遊びを積み重ねていくことで、徐々に友達の思いにも気付いていくが、このような環境では他者理解も思うように進まない状況が考えられる。現代の子どもを取り巻く環境は、整っているとは言にくい。そこには、家庭環境、希薄な友達との関係、周囲の大人との関係、保育者の存在など、様々な原因があると思われる。こうした人との関わりを協同と呼ばれ、最近ではよく使われるようになってきている。

平成20年3月28日に幼稚園教育要領が改訂された。協同について、領域「人間関係」の内容(8)「友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見出し、工夫したり、協力したりなどする」及び、内容の取扱い(3)「幼児が互いにかかわりを深め、協同して遊ぶようになるため、自ら行動する力を育てるようにするとともに、他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにすること」とある。本研究では、保育者と子どもがどのようにして、協同し関わりを深めていくのか、その生成過程に着目する。ここでは、協同する経験や協同的な学びなど様々な定義があるが、筆者の考える「協同」として論じていくこととする。筆者の考える「協同」とは、遊びや活動の中で他者と協力して、自己の感情を相手に伝え、相手の思いも受け止め、子ども達が自ら創り出した目標に向かって協力することと定義する。

目的

幼児期において、人との関わりがもっとも活発になってくるのが5歳児である。この時期の育ちが重要であることは明白である。

本研究では、従来の枠組みにとらわれず、「協同」が生成されていく過程を、子どものみではなく、保育者の立場からも探ることを目的とする。具体的には、兵庫県H幼稚園の5歳児の記録を作成する。また、各学年から合計5名の協力を得て、保育者の「協同」に対する取り組みの事例作成を依頼し、学期ごとにインタビューを行う。分析方法は、記録から抽出されたキーワードを表に示して「協同」の生成過程について考察する。インタビューでは、逐語録を作成し、保育者の「協同」に対する取り組みの変化を考察する。

研究方法

1、「協同」の生成過程における記録

- 観察場所：著者が勤務する兵庫県H幼稚園
- 観察期間：平成23年9月～平成24年3月
- 観察及び記録の方法
保育期間中は、フリーの立場で、補助に入ることがある。研究対の学級に自然に入り、保育者と子どもの関わりを記録した。記録については、その場で簡単なメモを取った。その後、メモや記録を元に、事例として書き下ろした。分析の対象となるのは26事例である。
- 研究対象クラス
年長組の一クラスを対象とした。
男児16名、女児17名、合計33名

○事例分析とその観点

収集された記録は、小田（2010）のエスノグラフィーの手法に従って分析を試みる。分析の観点について、子どもの行動と保育者側からの関わりの過程について考察する。

2、インタビューの分析

○インタビュー場所：保育室と園長室

○インタビュー期間：

第一回目 平成 23 年 12 月 26 日

第二回目 平成 24 年 3 月 21 日

○研究対象者：兵庫県H幼稚園の教員 5 名

○事例と分析とその観点

日々の「協同」に対する記録を作成したことに対して、自由に思ったことを話し合う小田（2010）ナラティブインタビューを行った。分析の観点として、逐語録を作成し、保育者側からの「協同」の生成過程について考察する。

総合考察

「協同」の生成過程には子ども自身の成長のみならず、保育者の関わりが大きく寄与することが明らかになった。子どもは、身近な保育者の支えによって、他者との関わり方をより深めていく。保育者の関わり方は、子どもの育ちに応じた関わり方が必要である。具体的には、1 学期であれば、他者との話し合いが継続するように関わることや、助け合うヒントとなる関わりをしていることである。つまり、子ども同士が関わり継続した働きかけを持続させるためには、保育者の援助が必要なのである。その援助も常に、子どもの今の課題を意識したものでなくてはならない。たとえば喧嘩では、その問題から逃げるのではなく、しっかりと当事者の子どもやクラスの子も達と話し合っていた。このことこそが、「協同」の生成過程でのもっとも重要な隠れた要素である。子どもの思いに立って考えることがどれだけ重要かが理解できる。

トイレの使用方法を考えるだけでも、共同して使う場であり、「協同」は十分に発生する。幼

稚園では、遊びから生活までほぼ全て「協同」なくして成り立たない。行動の表面上を見るのではなく、子どもの心情面や他者との関わりまで十分に観察し、行動することが「協同」の生成過程を見る上で、必要であることが明らかになった。

インタビューでは、保育者の気付きの重要性が示唆された。保育者は日常の生活に目標をしっかりともち、常に課題意識をもって取り組むことによって、保育の気付きに繋がる。「協同」の生成過程の根底にあるものは、子ども同士の関わりをどう強化していくかではなく、保育者自身の気付きが最も重要であることがこの分析からも明らかである。勿論、子ども同士の関わりを考えることは重要だ。しかし、それ以前に保育者の気付きと課題意識なくしては、ふさわしい子ども同士の関わりも発生しえない。そのためにも「協同」を考える上で、周りの保育者の関わりの重要性が、浮き彫りになった。

インタビューを行った保育者は、経験や知識など、様々な条件によって個々に能力は違っている。しかし、「協同」の課題に気付き、次の保育に生かしていく過程は、経験年数に関わらず、また学年の違いにも関わらず同じであった。保育者同士が、「協同」を意識する機会を設け、気付ききっかけを作ることが重要である。また、保育者においても、「協同」する仲間の存在が相互に話し合い良い影響を及ぼしていたことも重要な要素である。

今後の課題としては、本研究の「協同」の生成過程における、ある程度の認識を得ることができた。しかし、研究期間の関係上、およそ1 年間の過程を観察したものにすぎない。この点において、十分であったとは言い難い。また、筆者の幼稚園での観察でしかならず、今後他の幼稚園を含めた「協同」の生成過程も合わせて年間を通した研究が必要であると考える。

主任指導教員 名須川 知子
指導教員 名須川 知子